

令和5年度(2023年度) 外国語科教育に関する研究

中学校外国語科における自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成

－ 1人1台端末を効果的に活用した「Step Up Time」を通して－

内容の要約

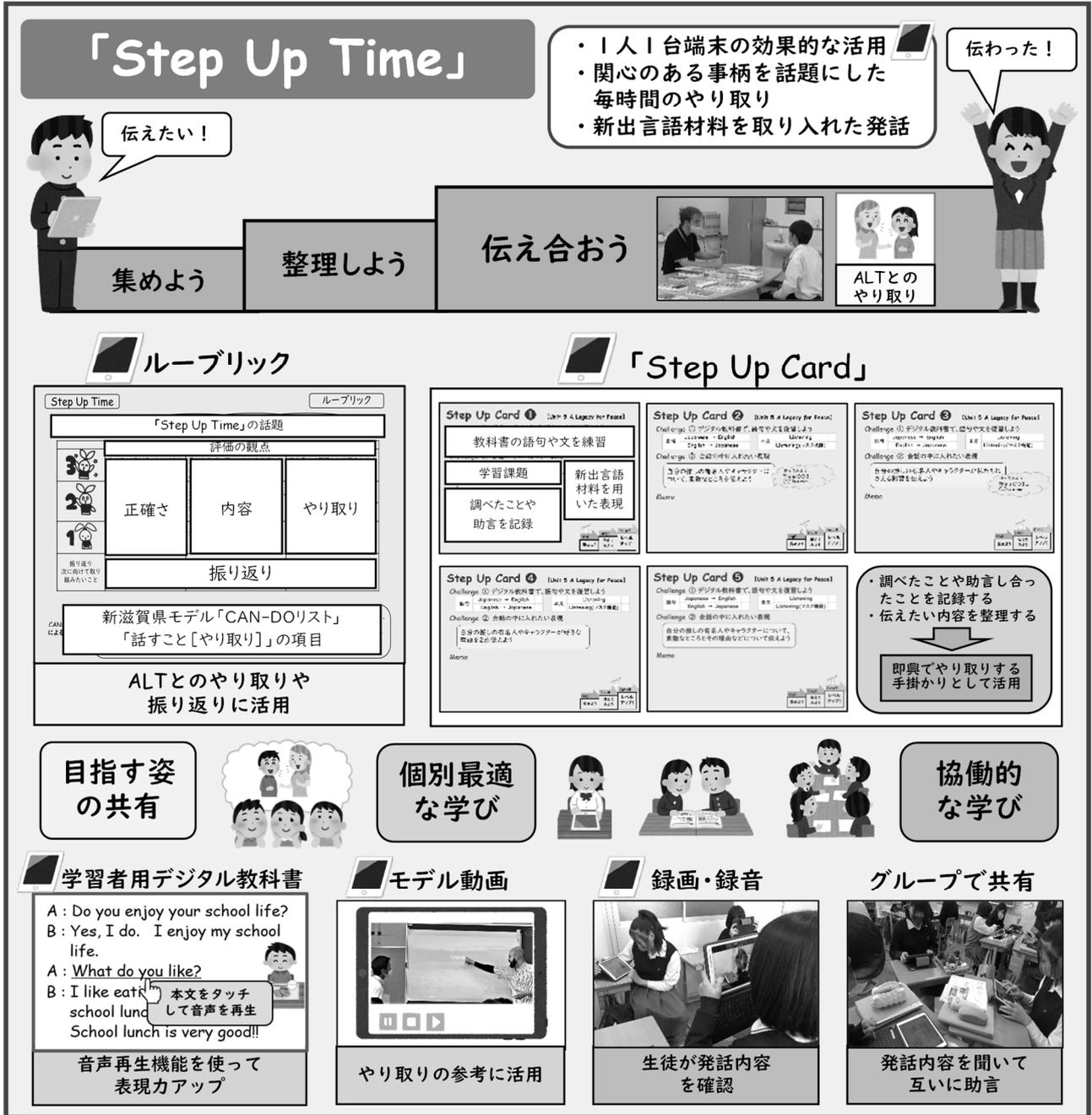
本研究では、中学校外国語科における自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成を目指した。中学校で扱う言語材料を段階的に用いて毎時間やり取りを行う「Step Up Time」で、生徒は自分が関心のある事柄について即興で伝え合った。「Step Up Time」では1人1台端末を効果的に活用し、ルーブリックやモデル動画を基に見通しをもって学習に取り組んだ。生徒は「Step Up Card」の記録や他者からの助言を基に、伝えたい内容を整理してやり取りを繰り返し行うことで、発話に自信をもち、自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成につなげることができた。

キーワード

自分の考えや気持ちを伝え合う力 毎時間やり取りを行う「Step Up Time」
 関心のある事柄 1人1台端末の効果的な活用 「Step Up Card」

目	次
I 主題設定の理由 (1)	V 研究の進め方 (4)
II 研究の目標 (2)	1 研究の方法 (4)
III 研究の仮説 (2)	2 研究の経過 (5)
IV 研究についての基本的な考え方 (2)	VI 研究の内容とその成果 (5)
1 外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成について (2)	1 自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成に向けた取組の実際 (5)
2 自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成に向けた取組 (2)	2 「Step Up Time」で1人1台端末を効果的に活用し、粘り強く学習を進める姿の実際 (8)
3 「Step Up Time」の充実に向けた1人1台端末の効果的な活用 (3)	3 ルーブリックによる各学年の到達目標と評価の観点の明確化 (9)
4 目指す姿の明確化に向けたルーブリックの活用 (4)	4 生徒と指導者の変容 (10)
5 自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成についての検証 (4)	VII 研究のまとめと今後の課題 (12)
	1 研究のまとめ (12)
	2 今後の課題 (12)
	文 献

自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成



外国語科教育に関する研究

中学校外国語科における自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成

－ 1人1台端末を効果的に活用した「Step Up Time」を通して－

I 主題設定の理由

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編(以下、学習指導要領解説という。)では、外国語科において、「互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を一層重視する」観点から、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の4技能の中で、「話すこと」を[やり取り]と[発表]の二つの領域に分け、五つの領域別に目標が設定された。その背景として、「授業では依然として、文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組、特に『話すこと』及び『書くこと』などの言語活動が適切に行われていないことや『やり取り』・『即興性』を意識した言語活動が十分でないこと¹⁾」などに課題があるとされている。

平成31年度(令和元年度)に実施された全国学力・学習状況調査の中学校英語において、「話すこと」の領域では、「まとまりのある内容を話す」の問題の全国正答率が45.8%(参考値)¹⁾であるのに対し、「即興でやり取りをする」の問題ⁱⁱ⁾では、全国正答率が10.5%(参考値)であった。分析結果から見られる課題として、「話すこと[やり取り]」に関しては、「情報や考えなどを即座にやり取りしたり、相手の発話の内容を踏まえて、それに関連した質問や意見を述べたりして、会話を継続させていくことに課題がある²⁾」とし、「日頃の授業で継続的にやり取りする機会を増やし、それができる力を育てることが大切²⁾」だと指摘されている。

これらのことから、日常的な話題等について自分の考えや気持ちを伝え合ったり、相手の発話の内容を踏まえて、それに関連した質問や意見を述べたりするような、必然性のある言語活動を充実させ、即興でやり取りを行うことで、外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成することが中学校外国語科に求められる。

さらに、「学習者用デジタル教科書の効果的な活用の在り方等に関するガイドライン」(令和3年3月改定 文部科学省)では、「児童生徒の学習の充実や学習上の支援のためにICTを効果的に活用することが求められている中で、各学校・教育委員会や教師の創意工夫により、学習者用デジタル教科書の特性・強みを生かした学習方法の開発・改善等が行われることが期待される³⁾」と示されている。令和6年度には、小学校5年生から中学校3年生までの1人1台端末に、英語の学習者用デジタル教科書が本格導入されることを踏まえ、効果的な活用方法を検討する必要がある。

当センターの令和4年度の研究では、小学校外国語科の「話すこと[やり取り]」と「話すこと[発表]」において、指導者がバックワード・デザインⁱⁱⁱ⁾による単元構想を行い、ICTを効果的に活用することで、児童が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整する言語活動の充実につながった。令和4年度の研究成果を生かし、本年度は、中学校外国語科において、1人1台端末を効果的に活用し、日常的な話題等について即興でやり取りを行う言語活動を設定し、その充実を図ることで、生徒の外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力が育成され则认为、本主題を設定した。

i) 中学校英語の調査の結果は「聞くこと」「読むこと」「書くこと」の合計を集計。「話すこと」に関する問題の結果については、全国平均正答数および平均正答率を別に集計して「参考値」として公表されており、都道府県、指定都市別の公表は行われていない。

ii) 令和5年度の同調査では、「即興で伝え合う」の問題において正答率は14.5%(推計値)であった。

iii) バックワード・デザインとは、「研修ガイドブック」において、単元の終末で目指す児童生徒の具体的な姿を明確にし、そこから逆算して1時間ごとの目標を定め、活動を組み立てながら単元を構成していくことである。

Ⅱ 研究の目標

1人1台端末を効果的に活用し、他者と即興でやり取りを行う言語活動を継続的に取り入れ、その充実を図ることで、生徒の外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成を目指す。

Ⅲ 研究の仮説

1人1台端末を授業や家庭学習において効果的に活用し、既習事項や新出言語材料を段階的に取り入れて即興でやり取りを行う「Step Up Time」を毎時間積み重ねていけば、生徒の外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成することにつながるだろう。

Ⅳ 研究についての基本的な考え方

1 外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成について

学習指導要領解説では、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力の育成を目指す外国語科の目標について、「『外国語で表現し伝え合う』ためには、適切な言語材料を活用し、思考・判断して情報を整理するとともに、自分の考えなどを形成、再構築することが重要である」¹⁾と示されている。また、「『即興で伝え合う』とは、話すための原稿を事前に用意してその内容を覚えたり、話せるように練習したりするなどの準備時間を取ることなく、不適切な間を置かずに関わり手と事実や意見、気持ちなどを伝え合うことである」¹⁾と示され、やり取りを行う際は、「相手の発話に応じることが重要であり、それに関連した質問や意見を述べたりして、互いに協力して対話を継続・発展させなければならない」¹⁾と述べられている。

さらに、伝えたい内容を整理するためには、「大まかな流れや主要な点を書いたメモに基づいて伝え合うなど段階的に指導することが大切である」¹⁾と示され、実際の指導に当たっては、考えを整理するための時間を設定するなど、計画的に指導していくことが重要であることが述べられている。

これらのことから、相手の発話に即座に回答すること、まとまりのある内容を整理して伝え合うこと、必要な情報を記録し、それに基づいて即興でやり取りを行う言語活動を継続的に行うことが重要であると考えられる。そのため、本研究では生徒が関心のある事柄や日常的、社会的な話題等について伝え合う際に、必要な言語材料を用いて伝えたい情報を整理し、他者と即興でやり取りを行う言語活動を設定する。その充実を図ることで、外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成を目指す。

2 自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成に向けた取組

(1) 関心のある事柄について即興でやり取りを行う場の設定

学習指導要領解説では、「身近な話題を選択したり、スピーチ活動などで扱ったことのあるテーマを取り上げるなど既習事項等を活用したりすることや、伝え合う活動を継続的にやり、生徒が自分の言いたいことを即興で表現できる範囲を徐々に拡大していくことが大切である」¹⁾と示されている。生徒が即興でやり取りを行うためには、生徒が伝えたい内容に関する情報を集め、既習事項や新出言語材料を発話に取り入れて話すことを繰り返す必要がある。そこで、中学校で扱う語句や文を段階的に用いて、即興で自分の考えや気持ちを伝え合う「Step Up Time」を設定する。「Step Up Time」は毎時間10分程度取り入れ、生徒にとってまず関心のある事柄で話題を設定する。新出言語材料を学習した後に「Step Up Time」を行うことで、生徒は新しい表現を発話に取り入れ、自分の考えや気持ちを表現する幅を広げることができるようになると考える。

(2) 「Step Up Time」で自分の考えや気持ちを伝え合うための手立て

「Step Up Time」を行う際には、生徒が伝えたい内容について情報を集め、学習した表現を使って自分の考えや気持ちを整理する必要がある。生徒が見通しをもって「Step Up Time」を進めていくために、「Step Up Card」(図1)を活用する。「Step Up Card」の「Challenge ①」(図1の「ア」)は、生徒が家庭において学習者用デジタル教科書を使用し、声に出したり書いたりして教科書の語句や本文の内容を確認する。生徒が個別に学習を進めることで、教科書に出てくる表現を再確認し、復習する場とする。「Challenge②」(図1の「イ」)は、生徒が単元で学習する新出言語材料を取り入れ、自分のこととして表現できるような内容を考え、記録するために活用する。生徒は家庭において、やり取りを行う際に必要な語句を集めたり、授業において、やり取りをして不十分だったことを記録したりして、自分の考えを整理し、次の「Step Up Time」に生かす。

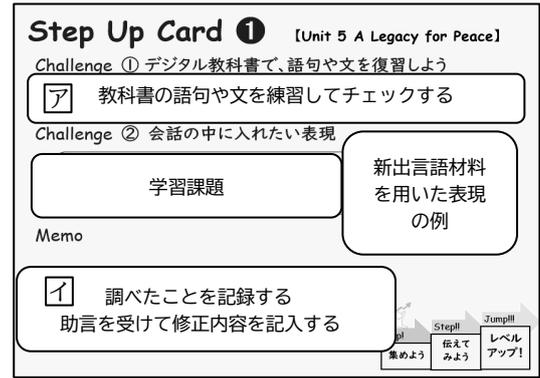


図1 「Step Up Card」(例)

指導者は「Step Up Card」を単元ごとに5枚程度作成し、単元開始時にまとめて配付する。それぞれのカードには、生徒が「Step Up Time」において、言語材料を使って自分の考えや気持ちを伝えることができるような学習課題を設定する。また、最後のカードには、単元の終末に行うパフォーマンステストの話題を示し、生徒がその話題に合った内容で「Step Up Time」でのやり取りを繰り返すことができるようにする。「Step Up Card」の記録を手掛かりにし、毎時間継続して「Step Up Time」を行うことで、生徒の外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成を図る。

3 「Step Up Time」の充実に向けた1人1台端末の効果的な活用

学習指導要領解説では、コンピュータなどの活用について、「生徒の実態、教材の内容などに応じて、視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワーク、教育機器などを有効活用し、生徒の興味・関心をより高め、指導の効率化や言語活動の更なる充実を図るようにすること」¹⁾が必要とされている。また、「外国語の指導におけるICTの活用について」(令和2年 文部科学省)では、1人1台端末が整備されることによって期待されるメリットが示されている(図2)。「Step Up Time」を行う際、情報を検索したり、録画して発話内容を繰り返し聞いたりするなど、図2の下線部のメリットを生かし、1人1台端末を活用した学習を進めていく。

例えば、「Step Up Card」を生徒の1人1台端末に配付し、生徒が必要な情報を書き込んだり、他者からの助言を記録したりして、自分の考えを整理し、蓄積された内容から即興でのやり取りを行うことができるようにする。また、「Step Up Time」における自分の発話内容を録画・録音し、動画や音声で確認したり、ペアやグループで互いに助言し合ったりすることで、やり取りがスムーズに行えるようにする。さらに、指導者

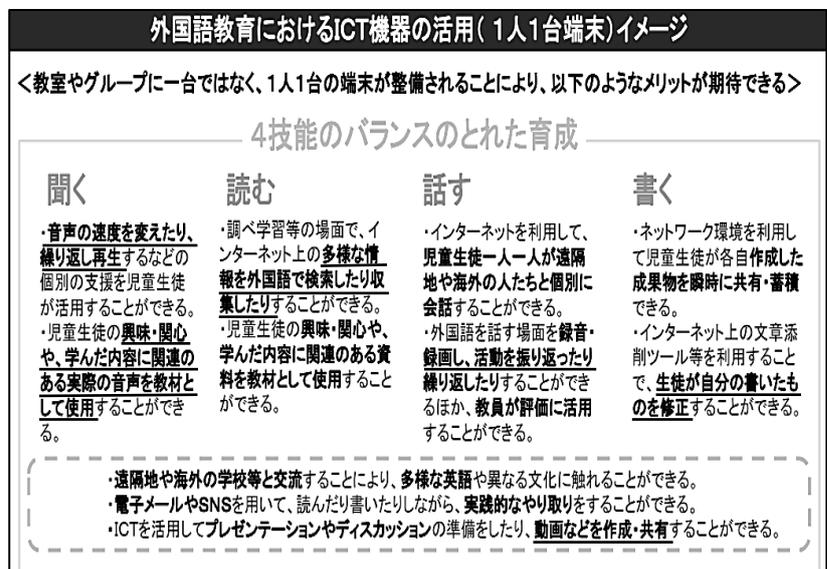


図2 1人1台端末活用のイメージ(一部)(下線は筆者)

と外国語指導助手(Assistant Language Teacher)(以下、ALTという。)等が作成するモデル動画を生徒が見返し、自分のことに置き換えてやり取りが行えるようにする。

学習者用デジタル教科書の活用では、生徒一人ひとりがマスク機能を使って、語句を日本語から英語に、英語から日本語に変換する練習を繰り返し行い、語彙の習得を図る。また、音声再生機能を使い、英文を何度も聞いたり、スピードを調整しながら声に出して読んだりして英語を使うことに慣れていく。そうすることで、教科書に出てくる言語材料を参考にして、「Step Up Time」の活動において、即興でのやり取りをスムーズに行うことができると考える。

このように、1人1台端末を効果的に活用することで「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、生徒の外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成につなげる。

4 目指す姿の明確化に向けたルーブリックの活用

指導者は、単元ごとにルーブリック(図3)を作成し、単元の始まりに1人1台端末に配付する。ルーブリックには、単元の終末に行うパフォーマンステストの話題が示されている(図3の「ア」)。生徒はその話題に沿って、「Step Up Time」で自分のこととして状況を思い浮かべ表現できる内容を考えていく。その際、生徒はルーブリックの評価の観点にある「正確さ」「内容」「やり取り」の項目を基に、自分の目標を定め、やり取りを行う。生徒は、単元の終末にALTとやり取りを行い、ALTのフィードバックを次の単元でのやり取りに生かすために振り返る。

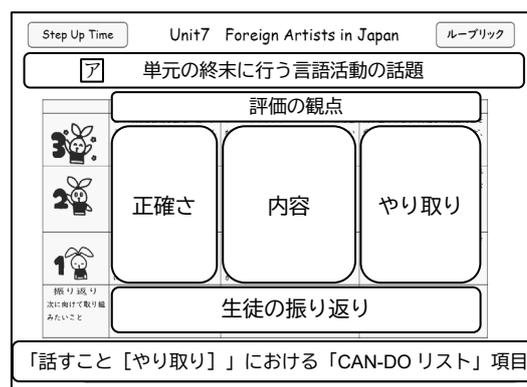


図3 ルーブリック(例)

また、ルーブリックには、「新滋賀県モデル『CAN-DOリスト』」¹⁾(以下、「CAN-DOリスト」という。)の「話すこと [やり取り]」における中学校3年間の学習到達目標を明記する。「CAN-DOリスト」は令和4年度改訂版から、学年別に目標が設定された。中学校3年間の目標を示すことで、生徒は目指す姿を明確にし、3年間の見通しをもって「Step Up Time」を行うことができると考える。

5 自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成についての検証

「Step Up Time」での生徒の活動の様子や「Step Up Card」の記録から、生徒が伝えたいことについて情報を集め、既習事項や新出言語材料を使って即興でやり取りを行うことができているかを見取る。単元の終末にALT等と行うパフォーマンステストによるフィードバックを基に、生徒の外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力が育成されたかどうか、検証する。

また、研究の始期と終期に行う質問紙調査で、「話すこと [やり取り]」を主とした言語活動について生徒と指導者の意識の変容を追い、本研究で行う「Step Up Time」が、外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成につながったかについて分析し、検証する。

V 研究の進め方

1 研究の方法

(1) 研究委員と研究の方向性、実証授業について共通理解を図り、第1学年と第3学年の生徒を対象に、「話すこと [やり取り]」の領域に焦点を当てた研究を進める。

¹⁾「新滋賀県モデル『CAN-DOリスト』」は、学習指導要領(平成29年告示)を踏まえて作成されたものであり、『『CAN-DOリスト』リーフレット』として県内全小・中・高等学校に配付され、滋賀県教育委員会のホームページに掲載されている。

- (2) 指導者は「CAN-DOリスト」の学習到達目標を踏まえた話題を生徒に示し、即興でのやり取りを通して自分の考えや気持ちを伝え合う「Step Up Time」の時間を設定する。
- (3) 「Step Up Time」では、生徒が1人1台端末に配付された「Step Up Card」に取り組む。生徒が「Step Up Card」に記録している内容を基にやり取りが行えているかを指導者が机間支援し、確認する。
- (4) 指導者は、1人1台端末に配付されているルーブリックや録画・録音された生徒の発話内容、指導者が作成するモデル動画を基に、生徒が主体的に学習を進めることができるように促す。
- (5) 「Step Up Time」での言語活動の様子やルーブリックに基づいたパフォーマンステストによるフィードバック、始期と終期に行う生徒質問紙調査の結果等を基に、生徒が即興でやり取りを行い、外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成につながったかについて分析し、検証する。

2 研究の経過

4月	研究構想、研究委員の委嘱	9月～11月	研究協力校での実証授業
5月	研究推進計画の立案	11月	生徒および指導者質問紙調査(第2回)
6月	第1回専門・研究委員会 生徒および指導者質問紙調査(第1回)	11月～12月	第3回専門・研究委員会 研究論文原稿執筆
6月～7月	研究協力校での実証授業	1月	研究発表準備
8月	第2回専門・研究委員会	2月	研究発表大会
		3月	研究のまとめ

VI 研究の内容とその成果

1 自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成に向けた取組の実際

(1) 「Step Up Time」を取り入れた授業展開の実際(Y校 第3学年 Unit3、4)

「Step Up Time」を授業に取り入れる際、生徒が学習した新出言語材料や新出語句等を使って自分のことを表現できるように意識した。ここでは、指導者が設定する「Step Up Time」の話題および「Step Up Time」を取り入れた授業展開について示す。

ア 目的や場面、状況等を意識した「Step Up Time」の話題設定

生徒が外国語でコミュニケーションを行う目的や場面、状況等を意識して「Step Up Time」の活動を行うために、指導者Aは表1のように、「Step Up Time」において生徒にとって関心のある事柄でやり取りする話題を設定し、授業実践を行った。ここでは、Unit3およびUnit4における話題設定について記す。

表1 教科書の題材や新出言語材料を踏まえた「Step Up Time」の話題設定(第3学年)

Unit	単元名および内容	新出言語材料	「Step Up Time」の話題
1	Sports for Everyone 人々を結びつけるスポーツ	現在完了(経験) make人+形容詞 show人+that節	自分の趣味やおすすめの○○について伝え合おう
2	Haiku in English 俳句の魅力と英語の俳句	現在完了(完了・継続) 現在完了進行形	自分や友達の意外な「○○歴」を伝え合おう
3	Animals on the Red List 絶滅危惧種	It... for... to... want人 to... let [help]人...	動物園や水族館の生き物について調べ、その生き物について感じたことなどを伝え合おう
4	Be Prepared and Work Together 災害時の外国人支援	間接疑問文 動詞+人+what 現在分詞 過去分詞	市の観光大使として、おすすめスポットを紹介し、よさをアピールしよう
5	A Legacy for Peace ガンディーの功績と受け継がれる理念	関係代名詞 (名詞修飾、who / that (which))	自分の一押しの有名人やキャラクターについて、素敵などところとその理由などについて伝え合おう
6	Beyond Borders 国をこえて助け合う大切さ	仮定法(wish / If)	宇宙旅行に行くことができれば、どこで何をしたいかを伝え合おう

教科書のUnit3の題材は、「世界の絶滅のおそれのある動物について知り、自分たちにできることを考える」である。指導者Aは、生徒が今までに動物園や水族館で見えてきた生き物を話題にすることで、教科書の内容に照らし合わせて発話内容を考えることができるのではないかと考えた。そこで、Unit3の「Step Up Time」の話題を「動物園や水族館にいる生き物について調べ、その生き物について感じたことなどを伝え合おう」と設定した。指導者Aは、自分が水族館に行っ

実際のイラストの写真を使い、モデルを示した。それを参考に、生徒aは、「〇〇動物園で見たパンダにしよう」とつぶやき、伝えたい内容を決めることができた。

教科書のUnit 4の題材は、「防災・安全への関心を高め、地域の一員として防災に取り組む意識をもつ」である。指導者Aは、この単元の新出言語材料を使うことで、地域の一員として、自分が住んでいる地域のよさを外国人に紹介できるのではないかと考えた。そこで、Unit 4の「Step Up Time」の話題を「市の観光大使として、おすすめスポットを紹介し、よさをアピールしよう」と設定した。指導者AとALTは、生徒がやり取りをイメージしやすいようにモデルを示したため、見通しをもって自分の住む町のよいところについて調べる生徒の姿が多く見られた。

このように、指導者が「Step Up Time」の話題を、生徒にとって身近で関心のある事柄に設定したことで、生徒はコミュニケーションを行う目的や場面、状況等を意識してやり取りの内容を考えることができるようになった。

イ 毎時間行う「Step Up Time」の授業展開

指導者Aは、Unit 3において「Step Up Time」を授業に取り入れた単元を計画し、第4時、第6時で以下のように授業を展開した(図4)。

Unit 3 単元計画		授業展開(第4時)	
時	☆めあて ○活動内容	展開	生徒の活動
1	☆単元で身に付ける技能や目標を知る ①授業の流れについて確認する ②Previewを聞き、単元の大まかな内容を共有する	展開①	新出言語材料を学習する want+(人など)+toの文の構造を知る 教科書やワークで練習問題を行う
2	☆It is...(for+(人など))+toの文の構造を知る ①自分にとって〇〇することは△△だと伝える ②「Step Up Time」「Step Up Card」・ルーブリック配付、説明	展開②	「Step Up Time」 学習課題: 生き物の大きさや生息地など、特徴を伝えよう ペアで新出表現を使うなどして、自分が調べたことを伝え合う 伝わりにくかったところをペアやグループの人に相談する アドバイスを「Step Up Card②」に記録する
3	☆It is...(for+(人など))+toを使った文を理解する ①教科書の内容を理解する ②相手にとって〇〇は△△か、質問する ③相手にとって〇〇は△△だ、と紹介する文章を書く ④「Step Up Card①」	展開③	教科書の内容を理解する ペアで教科書の会話を読む
4	☆want+(人など)+toの文の構造を知り、本文を理解する ①人に〇〇してほしいと伝える ②「Step Up Card②」 ③本文の内容を理解する	終末	授業を振り返る 次の授業の話聞く
5	①Mini Activityで自分のことを伝える ②let [help]+(人など)+動詞の原形の文の構造を知る	授業展開(第6時)	
6	☆絶滅の危機にある生き物について知る ①教科書の内容を読み、トキの現状について知る ②let [help]+(人など)+動詞の原形の文の構造を復習する ③「Step Up Card③」	展開①	教科書の内容を理解する 教科書の問題をグループで考える
7	☆絶滅の危機にある生き物について知る ①「Step Up Card④」 ②教科書の内容を読み、ゴリラの生息地について知る	展開②	新出言語材料の復習を行う ワークでlet [help]+(人など)+動詞の原形の文の構造を復習する
8	☆生き物について調べたことを伝える ①「Step Up Card⑤」でALTとやり取りする ②紹介したい生き物について、スライドにまとめる	展開③	「Step Up Time」 学習課題: その生き物について、さらに紹介したいことを調べ、伝えよう ペアで新出表現などを使って自分が調べたことを伝え合う 伝わりにくかったところをペアやグループの人に相談する ペアや指導者からのアドバイスを「Step Up Card③」に記録する 別の人に、修正したことを伝える
9	☆生き物について、1分程度で発表する ①生き物について1分程度で発表する ②発表内容を振り返る	終末	授業を振り返る 次の授業の話聞く

図4 「Step Up Time」を取り入れたUnit 3の単元計画(左)と第4時、第6時の授業展開(右)

第4時では、生徒は展開①で教科書や補助教材、デジタル教科書等を使って新出言語材料を学習し、練習問題を繰り返し行うことで知識・技能を習得した。その後の展開②で「Step Up Time」を行った。そして、「Step Up Time」が終わると、教科書の内容理解に取り組んだ。第6時では、生徒は展開①で教科書の内容理解に取り組み、その後の展開②で前時に行っていた新出言語材料の復習を行った。そして、展開③で「Step Up Time」を行い、生き物について相手に紹介した。

このように、生徒の学習状況に合わせ、新出言語材料を用いて行う「Step Up Time」を取り入れるタイミングを調整することで、生徒は、単元で学習した言語材料を使うことができ、自分の考えや気持ちを表現しやすくなり、やり取りに必要な表現力を高めることができた。

(2) 「Step Up Card」を活用した「Step Up Time」での活動の実際(Z校 第1学年 Unit 7)

ア 「Step Up Card」を、情報収集のために活用する姿

指導者Bは7ページの表2のように、「Step Up Time」において生徒がやり取りする話題を設定

し、授業実践を行った。ここでは、Unit 7における「Step Up Card」の活用について記す。

表2 教科書の題材や新出言語材料を踏まえた「Step Up Time」の話題設定(第1学年)

Unit	単元名および内容	新出言語材料	「Step Up Time」の話題
1	New School, New Friends 中学校生活の始まり	be動詞と一般動詞(肯定文、否定文、疑問文) can/cannot	自分の好きなことや普段すること、できることについて伝え、質問し合おう
2	Our New Teacher 身近な人やもの紹介	This(That) is / He(She) is What(Who)is...?/How(What)do you...?	
3	Club Activities 互いの部活動について	Where(When) ...? / want to (be) How many...?	
4	Friends in New Zealand 日本以外の国のこと	命令(指示) Don't / What time...? What... do you ...?	1日の生活の中で相手と同じところと違うところを見つけよう
5	A Japanese Summer Festival 夏祭りについて	前置詞 like(enjoy) ...ing 過去形	夏休みにしたことや楽しかったことについて伝え合おう
6	A Speech about My Brother 他者紹介	三人称単数現在(肯定文、否定文、疑問文)	ALTの先生に、学校の先生を一人紹介し、素敵なところを伝えよう
7	Foreign Artists in Japan 日本の伝統文化	目的を表す代名詞 疑問詞(Which, Whose) 所有代名詞	日本のアニメキャラクターを二つ(二人)説明し、お気に入りを選んでもらおう
8	A Surprise Party パーティの相談	現在進行形(疑問詞疑問文含む) 感嘆文(How...! What...!)	留学生を受け入れるため、冬休みに会う約束を国際電話で行おう
9	Think Globally, Act Locally 国際協力・国際支援	want (try, need) to... What do you want to ...? look 形容詞	留学するならどこに行って何をしたいか伝え合おう
10	Winter Vacation 冬休みの出来事・旅行	過去形(肯定文・疑問文・否定文)	冬休みに家でしたことを、感想を入れて伝え、2024年の抱負も伝え合おう
11	This Year's Memories 1年間の思い出	be動詞の過去形 There is(are) 過去進行形	1年間の中学校生活を振り返り、思い出に残っていることや2年生でしたいことを伝え合おう

指導者Bは、Unit 7の「Step Up Time」の話題を、「日本のアニメキャラクターを二つ(二人)説明し、お気に入りをを選んでもらおう」とした。指導者Bは、日本のアニメは外国でも人気があり、外国人が日本に興味をもつきっかけになっているということを生徒に伝え、興味・関心を引き出した。

生徒bは、「Step Up Card①」の学習課題である「日本のアニメキャラクターを一つ(一人)紹介しよう」を見て、「どれにしよう」とつぶやいた。生徒bは、「Step Up Card①」に伝えたいキャラクターの名前を記入し、そのキャラクターの情報を集めた(図5)。また、「Step Up Card③」では、やり取りを継続させるために、相手のキャラクターの得意なことを尋ねようと考え、「good at」と記録した(図6)。生徒bは、相手が話した内容に合わせて、「What is he good at?」と質問し、やり取りを継続することができた。

このように、必要な語句をあらかじめ準備したり、相手に質問したいことを考えたりしてからやり取りを繰り返す行いによって、自分の考えや気持ちを自分の言葉で伝え合うことができる生徒の姿が見られるようになった。

イ 「Step Up Card」で自分の考えを整理し、次の「Step Up Time」に生かす姿

生徒cは、自分が好きなアニメからキャラクターを二人選び、「Step Up Card①、②」に人物名や出身、特徴などの情報を、写真を添付するなど工夫して記入した。最後の「Step Up Card⑤」ではそれらの情報を整理し、自分が特に伝えたい内容を精選して記入した(図7)。



図5 生徒bの「Step Up Card①」(枠内は筆者)



図6 生徒bの「Step Up Card③」(枠内は筆者)

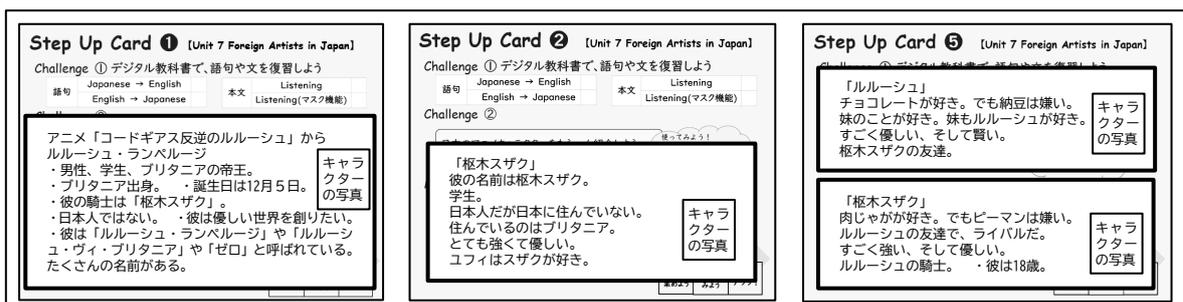


図7 生徒cの「Step Up Card」(枠内は筆者)

「Step Up Time」では、「Step Up Card」の学習課題に基づき、新たな言語材料を加えながら、伝える内容を増やしていくことができる。「Step Up Time」の話題でやり取りを行うための準備として「Step Up Card」を活用することで、生徒は見通しをもって学習を進め、聞き手の立場を考えて情報を整理し、即興でやり取りを行う姿が見られるようになった。

2 「Step Up Time」で1人1台端末を効果的に活用し、粘り強く学習を進める姿の実際

(1) 1人1台端末を活用して学習を調整する生徒の実際(Y校 第3学年 Unit4、5)

ア 伝えたい語句や発音を自ら確認し、モデルから学習を進める姿

Y校では、「Step Up Time」を行う際、生徒が1人1台端末の様々な機能を活用して学習を進めていた。

生徒dは、Unit4の話題である「市の観光大使として、おすすめスポットを紹介し、よさをアピールしよう」で、ALTにすすめたい場所について説明する際に使いたい「並木」という語句を端末で調べた。生徒dは、その単語の正しい発音を知るため、端末を用いて検索し、音声を再生した。生徒dは、耳を近づけて何度も聞き、声に出してみることで、使いたい語句を繰り返し練習し、語彙の習得を図った。

生徒eは、父親の職場を紹介することに決め、指導者AとALTのやり取りのモデルを参考に、自分の発話内容を考えた(図8)。「Step Up Time」では、ペアでのやり取りの際に、モデルの内容を基に即興でのやり取りを行った。実際のALTとのやり取りでは、お酒の写真を示して父親の職場について紹介していた。生徒eはモデルと異なる質問にも一生懸命自分の言葉で答えようとしていた。やり取りが終わると、生徒eは笑顔でALTと挨拶を交わした。自席に戻り、「お父さんの職場のことに興味をもってもらえた」と友人に話し、自分の英語が伝わったことを喜び、達成感を得たようであった。

	
指導者A I want to visit interesting spots in England, but I don't know where they are in England. ALT Do you know ○○ Lake? 指導者A ○○ Lake? I've never heard of it. (中略) ALT Do you like water sports? 指導者A Yes. I've tried water sports three times in Shiga. ALT Do you know canoeing? 指導者A Like a boat? I know it. ALT You can enjoy canoeing on the lake in summer. 指導者A Is it hot or is it cold in England? ALT In July and August, it's quite hot, but not as hot as Japan. 指導者A Oh, really? Japan is hotter than England. (以下、省略)	ALT I want to visit interesting spots in ○○. Where can I go? 生徒e Do you know "○○ shuzo(酒造)?" ALT "○○ shuzo?" No... <u>What is it?</u> 生徒e It means... sake... Japanese sake. ALT Oh, <u>do you have a picture?</u> 生徒e Yes! These are Japanese sake. ALT My father's company. These are Japanese sake made by my father and his friends. ALT Wow, amazing. (中略) ALT <u>Is this popular?</u> 生徒e Hmm...hmm... difficult...very difficult. But maybe popular. ALT I want to try it. Thank you.

図8 モデル(左)を参考にした生徒eとALTのやり取り(右)(下線は筆者)

イ 録画・録音し、互いに助言して表現力を高め合う姿

Unit5の「Step Up Time」の話題は、「自分の一押しの有名人やキャラクターについて、素敵なところとその理由などについて伝え合おう」である。生徒はペアでやり取りを行った後、グループで話し合う時間の中で、相手にうまく伝わらなかったことを改善する方法を互いに助言し合った。生徒fと生徒gは、ペアでのやり取りの際に互いの発話を録画し(図9)、グループでの活動時に発話内容を見返した。生徒fが「音楽界に影響を与えた人」と表現したいと伝えた際、生徒gは、「その表現は教科書に載っていたよ」と助言した(図10)。生徒fは、助言を基に、「音楽に影響を与える」という表現を英語で「Step Up Card」に記録し、「This is the person who has influenced the music.」とわかりやすく伝えることができた。



図9 発話を録画する様子



図10 助言し合う様子

確認した。また、「やり取り」の項目(p.9の図11のウ)にも目を向け、自然なやり取りができるよう、相手が紹介するキャラクターに、「I know him.」と即座に返していた。

生徒が「Step Up Time」において繰り返し即興でやり取りを行う中で、ループリックで到達目標を確認することで、その目標に向かって学習を調整する姿が見られるようになった。

(2) ALTとのやり取りの後、伝え合う力を高めるために振り返る姿(Y校 第3学年 Unit5)

単元の終末に「Step Up Time」の話題について、生徒とALTがやり取りを行った。これまでの「Step Up Time」での生徒同士のやり取りを基に、生徒は自分の一押しの有名人やキャラクターについてALTに自分の伝えたい内容を整理した。生徒jは、ALTに自分の一押しとして挙げた人物について、

1人1台端末に保存した写真を見せて、単元の言語材料である関係代名詞を使い、「This is the character that I like the best.」と話し始めた。やり取りの途中では既習事項を活用し、自分から「Have you ever seen him?」とALTに質問した。ALTは生徒jが示した写真を見て、「Please tell me why you like him.」と質問し、生徒jは自分がそのキャラクターを好きな理由を、「He is very

	文法・語彙の正確さ	内容について	やり取りについて
3	習った文法表現を正確に使い、ネイティブスピーカーがきちんと理解できる	推しの有名人などの素敵などについての情報量が十分で、調べたことを正確に伝えている。また自分の考えや気持ちに十分に伝わっている	聞かざることなく、相手の発話内容を受けて質問したり答えたりするなど、自然なやり取りを行っている
2	習った文法表現をある程度正確に使い、ネイティブスピーカーがきちんと理解できる。しかし間違いが少しある	推しの有名人などの素敵などについての情報量は多く、調べたことや自分の考え、気持ちを伝えようとしているが、内容が整理できていないところがある	不自然な間が空くことがあるが、相手の発話内容を受けて質問に答えるなどのやり取りを行っている
1	習った文法表現を使わない、または誤った使い方をしており、ネイティブスピーカーが理解しにくい	推しの有名人などの素敵などについての情報量が少なく、内容が整理できていない	不自然な間が空く、相手の発話内容を受けてやり取りが十分ではない
振り返り 次に向けて取り組 みたいこと	関係代名詞や接続詞、受け身などを活用することができた。いろいろな語句を修飾して、詳しく伝えることができたと思う。	自分が紹介するキャラクターについて詳しく調べて正確に伝えて、自分の考えや想いを一緒に伝えることができた。そしてキャラクターの魅力を何個かに分けて紹介し、先生と語り合うことができた。	今までのALTの先生との会話などでは、自分の伝えたいことしか話していなかったが、「Yes, yes!」「Me, too」「I think so!」などあいづちをして会話を自然とこなすことができ、盛り上がったと思う。

図12 生徒jの振り返り(一部)(枠線は筆者)

kind to his friends.」と伝えた。ALTは、1人1台端末に保存されているループリックの項目に丸を付けて生徒の学習状況をフィードバックした(図12のア)。生徒jは、やり取りが終わると学習状況を確認し、項目に沿って振り返った(図12のイ)。

「Step Up Time」を毎時間行い、生徒同士で情報や考えなどのやり取りを繰り返し行うことで、生徒は語彙力や表現力を身に付け、思ったことを自分なりの表現で伝え合う姿が見られるようになった。また、ペアでのやり取りを経て、ALTとやり取りを行う際には、生徒が伝えたい内容を覚えてALTに話すだけでなく、ALTからの質問に即座に答えてその理由を話したり、ALTに質問して答えてもらったりするなどしてやり取りを継続させることができた。生徒は自分の英語が相手に伝わる喜びを感じるとともに、達成感を得ることができたと考える。

4 生徒と指導者の変容

(1) 生徒の姿から(Z校 第1学年)

「Step Up Time」を継続して行うことで見られた生徒の様子の変容について述べる。

Z校の1年生においては、研究初期では、思ったことを1文で伝えるだけの生徒が多く見られた。「Step Up Time」を毎時間取り入れ、自分が調べたことや考えたことを整理していくうちに、習った表現を使って相手に自分のことを伝えようと試行錯誤したり、相手の話を理解しようと耳を傾けたりする生徒の姿が見られるようになった。

2学期に入り、学習する言語材料や語句が増えるにつれて、生徒は「Step Up Time」で様々な表現を使うようになった。生徒kはUnit 6、7で学習した三人称単数現在形の表現を使い、「Step Up Time」で自分が好きなアニメキャラクターを紹介する際には、生徒lの発話に即座に反応してやり取りを継続させようとしていた(p.11の図13)。生徒kはやり取りの途中で誤った表現を使用していたが、別の相手とやり取りする際に自分の間違いに気付き、正しい表現でやり取りを行うことができた。生徒kは、「時々間違った表現をすることもあるが、相手が話す内容をしっかりと聞いて、自分と

似た考えをもっていることなどについて会話を続けることができるようになったのが嬉しい」と振り返った。

このように、繰り返し行われる「Step Up Time」を通して、失敗を恐れず自分の言葉で英語を話すことを楽しむ生徒の姿が増えた。そして、ペアを変え、やり取りを繰り返し行ううちに、相手の答えや質問に合わせて即興でやり取りすることができるようになってきた。生徒が既習事項を取り入れて、自分にとって関心のある事柄でやり取りを繰り返し行い、粘り強く学習に取り組んだことで、単元が進むにつれて伝えたい気持ちが高まり、生徒は自分の英語が相手に伝わる喜びを感じるとともに、達成感を得ることができたと考える。



図13 生徒kと生徒lのやり取り
 (*は誤用を含む)

(2) 生徒の意識調査から

本研究では、研究始期である6月と研究終期である11月に、生徒を対象とした質問紙調査を実施した(図14)。

「英語の学習は好きである」および「授業で英語を話すとき、『今までに習った表現』をうまく使って会話が続くようにしている」の設問では、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した生徒の割合は、両校ともに増加した。これは、「Step Up Time」を通して、単元で扱う言語材料を繰り返し使うことで、生徒は自分の発話に自信をもつことができるようになったことの表れであると考えられる。

「話すこと[やり取り]」に関する設問「友達やALTとのやり取りの際、相手の意見に関わらせながら自分の考えや気持ちを伝え合うことができる」では、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と肯定的に回答した生徒の割合は、67%から74%に増加した。

「Step Up Time」でやり取りを繰り返すことで他者の多様な考え方を理解し、相手の意見を踏まえて外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力の育成につながったと考えられる。また、ICTの活用に関する設問「英語の授業や家庭学習において、PC・タブレットなどのICT機器を使用して学習を進めている」では、肯定的な回答が79%から84%に増加した。Z校の生徒mは「これまでの使い方だけでなく、メモに使ったり、やり取りの時に写真を見せたりして使うことができた。これからも使っていきたい」と振り返った。「Step Up Time」を通して、1人1台端末を効果的に活用することが、生徒自身の考えや気持ちを伝え合う際の手立てとして有効であったと考えられる。

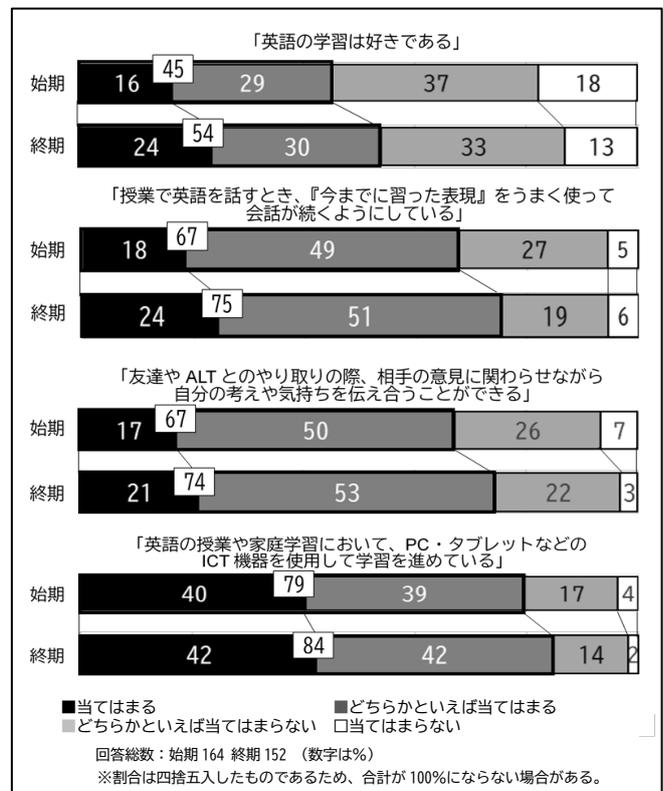


図14 質問紙調査の結果(一部)

(3) 指導者の意識の変容

研究始期の質問紙調査において、両校の指導者は、五つの領域別目標の中で、特に「話すこと[や

り取り]」に指導の難しさを感じていた。しかし、「Step Up Time」の取組を通して、生徒が伝えたいことを自分で調べて試行錯誤する姿や、互いに助言し合う姿が見られたことで、研究終期では、指導者が本研究での継続的な実践の意義を感じていることがうかがえた(図15)。

- ・「Step Up Time」を毎時間繰り返し行うことで、相手に伝えようと試行錯誤したり、会話を続けようとしたりする姿が見られ、生徒が自信をもって発話できるようになった。
- ・モデルを示す際、これまでに学習したことを使って発話できることを生徒と共有できた。教科書の題材だけでなく、生徒にとって身近な事柄を話題にしたことが、生徒の伝えたい気持ちを高めることにつながった。
- ・自分の考えや気持ちをペアやグループで話し合う機会が増えたことで、生徒間につながりができ、様々な活動において「協働的な学び」に向かう姿が見られるようになった。

図15 「Step Up Time」を継続して行った指導者の所感(一部)

VII 研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

- (1) 生徒が目的や場面、状況を意識して即興でのやり取りを行うために、生徒にとって関心のある事柄を話題にした「Step Up Time」を積み重ねることで、生徒は自分の発話に自信をもち、伝わった喜びと達成感を得ることにつながった。
- (2) 生徒が「Step Up Card」を活用し、発話内容を整理したり、互いに助言し合って記録したりすることで、生徒は粘り強く学習に取り組むことができ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実が図られ、外国語で自分の考えや気持ちを伝え合う力を育成することにつながった。
- (3) 1人1台端末を効果的に活用し、ルーブリックやモデル動画を生徒が見返すことで、生徒は「Step Up Time」において見通しをもち、単元の目標に向かって学習を調整する姿につながった。

2 今後の課題

- (1) 言語活動において生徒が自信をもって自分の考えや気持ちを伝え合えるようにするため、生徒の体験等に基づき、日常的、社会的な話題を含め、より関心のある事柄で話題を設定する必要がある。
- (2) ルーブリック等を生徒の学習状況に合わせて改良するなど、1人1台端末を効果的に活用し、即興でのやり取りをより活発に、継続して行う必要がある。

文 献

- 1) 文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編」、平成30年(2018年)
 - 2) 国立教育政策研究所「令和元年度 全国学力・学習状況調査報告書」、令和元年(2019年)
 - 3) 文部科学省「学習者用デジタル教科書の効果的な活用の在り方等に関するガイドライン」、令和3年(2021年)
- 文部科学省「外国語の指導におけるICTの活用について」、令和2年(2020年)
- 滋賀県教育委員会「『CAN-DOリスト』リーフレット」、令和4年(2022年)

	トータルアドバイザー	
	国立大学法人滋賀大学教育学部教授	大嶋 秀樹
専 門 委 員	滋賀県教育委員会事務局幼小中教育課指導主事	宇田 竜子
研 究 委 員	高島市立湖西中学校教諭	辻村 元喜
	守山市立守山南中学校教諭	高田 倫子
研 究 協 力 校	高島市立湖西中学校	
	守山市立守山南中学校	